チト書序言

チトのこと　チトはパウロの弟子、知友のうちで、とくにその寵愛をこうむった人であるのだが、その名は使徒行録に見られず、パウロの書簡中にも、まれにしか出ない。それゆえ、その生国もつまびらかでない。元来異邦人で、おそらくパウロの尽力によってキリスト信者となったものだろう。アンチオキアにおいてユデア教の人々が騒動を起こした時にチトはそこに居合わせた。さて、約紀元五一年ころ、パウロはチトをエルザレムの会議に連れて行ったところ、まだ割礼を受けていなかったために、ユデア教主義の人々は割礼が必要だと言って受けさせようとしたが、パウロは断固としてこれを謝絶した。およそ五四年になって、コリントへの書簡をしたためたころ、パウロは三回までもチトをコリントに遣わしたが、最初はエルザレムの貧しい信者に対する醵金をつのるため、次は先の書簡がコリント教会に及ぼした影響を視察させるため、その次は醵金のことを終結するためであった。チトに関する他の事がらは本書に見られる、すなわちパウロがロマでの第一回の入獄ののち、自由を得てチトとともにクレタ島に渡り、以前チモテオをエフェゾに残したようにチトをこの島に残して、地方の教会を組織させるために全権を彼にゆだねたところ、古代の歴史家の伝えるところによると、チトは老年に至るまでクレタ島に生活して司教の職を奉じたと言われる。クレタは今日ではカンジアと呼ばれ、表面はトルコ国の主権のもとにあるが、実際には自治の島である。パウロの時代にはギリシアに通じてロマ帝国に属し、人口稠

密で町の教会も非常に多かった。

本書をしたためた機会および目的　本書の文によると、この地にはパウロとチトとがクレタに渡った以前から、各所に各階級の信者があったと見られる。パウロが他国へ渡ろうとするにあたってチトをクレタに残したのは、創立してからまだ日の浅い教会をよく整理して、すでに起こりつつあった弊害を、ため直させるためであったが、別れるに先立って必要な教訓を口ずから与えたにもかかわらず、しばらくしてから、クレタの教会の整理に特別の困難を感ずる事情があったので、パウロは更に書簡をもって教訓を与えることを必要としたのである。それゆえ目的は、ただチトによくその職分をつくさせようとすることにある。

本書の題目および区分　本書はチモテオ前書と似たところが多い。それは本書がほとんどチモテオ前書と同一の時代に、ほぼ相似た機会、目的によって送られたものであるから無理もない。要するに両書とも司教たる者に教会でよく万事を処理させるために重要な教訓を与えるものである。本書を区分すると、例の挨拶を含んだ冒頭（一章一～四節）ののち、本文は二編に分けられる。第一編では、パウロはチトに向かって、よき聖職者を選抜するにあたって熟慮すべきことを勧め（一章五～十六節）、第二編では教授するため、各階級の信者を導くために最も良い規則を与えた（二章一節～三章十一節）。終わりに簡単な末文がある（三章十二～十五節）。

使徒聖パウロ、チトに送りし書簡

冒頭

1 **挨拶**　1 神のしもべにしてイエス・キリストの使徒たるパウロ、共通の信仰により
て、わが実子(じっし)[1]たるチトに「書簡を送る」。わが使徒たるは、神に選まれたる人々の信仰に応じ、ま
2 た人を敬虔に導きて、2 永遠の生命の希望を生ぜしむる真理の知識に応ずるためなり。すなわち
3 偽り給わざる神は世々の以前よりこの希望を約し給いしに、3 時至りて御言葉を表わすに宣教を
もってし給い、その宣教は、わが救い主にてまします神の命によりてわれに託せられたるなり。
4 4 願わくは父にてまします神およびわが救い主キリスト・イエズスより恩寵*と平安とを賜わらん
ことを。

第一編　良き聖職者の選択に関する教訓

5 **司教司祭の選抜**　5 わが汝をクレタ〔島(じま)〕に置きしは、なお欠けたるところを整え[2]、かつわが
6 汝に命ぜしごとく町々に長老[3]を立てしめんためなり、6 すなわち、とがむべきところなく、一婦(いっぷ)
の夫にして、もし子どもあらばこれも信徒にして、放蕩(ほうとう)をもって訴えらるることなく、従わざる

7 ことなき子どもを持てる人たるべし。7 けだし監督は、神の家司としてとがむべきところなき人
たるべし。すなわち自慢せず、短気ならず、酒をたしなまず、人を打たず、恥ずべき利を求めず、
9-8 8 旅人を接待し、善を好み、4 怜悧にして義人たり、信心家6にして節制家たり、9 教えによれる誠
の話7を固く取り、健全なる教えによりて人を勧むることを得、反対をとなうる人に答弁するを得
る人たるべし。

10 **偽教師のありさま**　10 けだし従わずして贅弁をろうし、もって人をまどわす者、ことに割礼の
11 人々のうちに多し。11 彼らは恥ずべき利のために教うべからざることを教え、全家をもくつがえ
12 すがゆえに彼らをして閉口せしむるを要す。12 彼らのうちなる一人の予言者は言えり、「クレタ
人はいつも虚言をはきて、悪しき獣、乱惰の腹なり」と。

13 **きびしく戒むべし**　13 この証言は誠なり、このゆえに汝、彼らをして信仰に健全ならしめんた
14 めに鋭くこれを譴責し、14 ユデア教の寓言と、身を真理にそむくる人々の戒めとによることなか
15 らしめよ。15 清き人々には、ものみな清けれども、汚れたる人、不信の人には清きものなく、その
16 理性と良心と、ともに汚れたり。16 彼らは自ら神を知り奉れりと宣言すれども、行ないにおいて
は、これを捨てて実に憎むべきもの、反抗するもの、いっさいの善業につきてのすたりものなり。

①ラテン訳では愛子。②ラテン訳では改め。③司教司祭の意。④ラテン訳では親切にして。⑤ラテン訳では
節制。⑥ラテン訳では聖。⑦チモテオ前書1・15

第二編　宣教および牧会の法則

第一項　各階級の信徒の務め

1 **第二章　教うべきこと**　1しかれども汝は健全なる教えに相当することを語れ。
2 老人に　2老人には節制し、尊くかつさとくして、信仰と愛と忍耐とに健全ならんことを勧め、
3 老女には同じく聖女らしき行儀を守りて、そしらず、酒をたしなまず、よく教えんことを勧め、
5-4 4彼らをして若き女をさとく教えしめ、その夫を愛し、その子どもをいつくしみ、5怜悧、貞操、
（謹慎）にして家事を治め、親切にして夫に従い、神の御言葉の、ののしられざるようにすべき
ことを教えさせよ。
6 青年には同じく謹慎ならんことを勧むべし。
8-7 言行一致　7万事につきておのれを善業の模範に供し、教うるに廉潔と厳格とを表わし、8言
葉健全にしてとがむべきところなかるべし、これ反対者が、われらの悪をあぐるに術なくして、
自ら恥じんためなり。
10-9 奴隷に　9奴隷にはその主人に従いて何ごともその旨をなし、言い逆らわず、かすめず、10わ
が救い主にてましますの神の教えを万事に飾らんために、何ごとにつきても忠実を表わさんことを
勧めよ。
12-11 キリストの恵みは完徳を要求す　11けだし、いっさいの人に救いとなる神の恩寵現われ、12わ
れらにさとすに、不敬虔と世俗の欲とを捨てて謹慎と正義と敬虔とをもってこの世に生活すべき

13 こと、13 幸いなる希望すなわちわれらの救い主にてます大御神イエズス・キリストの光栄な
14 る公現[7]を待つべきことをもってせり。14 キリストが、われらのためにおのれを渡し給いしは、わ
れらをいっさいの不義より贖いて、善業に熱心なる固有の民[8]を、おのがために清め給わんとてなり。
15 結局 15 汝、これらのことを全き権威をもって語り、かつ勧め、かついさめよ、たれも汝を軽
んずべからず。

①ラテン訳では聖なる身なりにおいて。②ラテン訳では、さとからんことを教えしめ。③ラテン訳では家をおも
んばかり。④ラテン訳では敬えに廉潔に厳格に。⑤ラテン訳では恐れ入らん。⑥エフェソ書6・5〜9、コロ
サイ書3・22〜25、チモテオ前書6・1、2 ⑦ラテン訳では来臨。⑧ラテン訳では、み心にかなうべき。

第二項　外界に対する信徒の務め

第三章

1 信徒に注入すべき教訓　1 汝、彼らをさとして、君主および有権者に服し、言わること
2 とに従い、すべての善業におのれを備え、2 たれをものしらず、争いを好まず、寛仁にして、
すべての人に対してあらゆる温和を表わすことを忘れざらしめよ。

3 信徒のよく務むべき理由　3 けだし、われらもかつて無知、不信心にして、迷いてさまざまの
4 欲望と快楽との奴隷となり、悪としっとのうちに生活し、憎まるべくして相憎む者なりき。4 し
5 かれども、わが救い主にてます神の慈恵と仁愛との現わるるに及び、5 われらが行ないし義
の業によらず、御慈悲によれる再生の水洗い[1]と聖霊によれる一新とをもって、われらを救い給い、
7-6 6 イエズス・キリストをもって、聖霊を豊かにわれらに注ぎ給いしは、7 われらがその恩寵*によ

りて義とせられ、永遠の生命の希望における世継ぎとならんためなり。

結局　8 これ真実の話にして、われこれにつきて汝の断言せんことを欲す、そは神を信じ奉る人々をして励みて善業に従事せしめんためなり。かかる業こそは善良にして人に益あることなれ。

チトの一身上に関する戒め　9 愚かなる問題と系図と争論と律法上の争いとを避けよ、そは無益にして、むなしければなり。10 異説者を一たび二たび訓戒してのちはこれに遠ざかれ、11 そはかくのごとき人の罪せらるるは自らの判断にもよることなれば、よこしまにして誤れる者なることを知ればなり。

結　末

諭告　12 われ、アルテマあるいはチキコを汝に遣わしなば、急ぎてニコポリなるわがもとに来れ、われ冬をかしこに過ごさんと決したればなり。13 律法家なるゼナおよびアポルロを手厚く送りて足らざることなからしめよ。14 かくてわれらの「兄弟たち」も実を結ばざる者とならざらんため「兄弟の」必要に応じて善業に従事することを学ぶべし。

伝言　15 われとともにおる人々、みな汝によろしくと言えり。信仰においてわれらを愛する人々によろしく伝えよ。

祝禱　願わくは神の恩寵、汝ら一同とともにあらんことを、アメン。

① 洗礼の意。